

この連研を通して、
感じたこと気づいたこと、
うれしかったことを話し合ってください。

その場に居合わせた人同士に心のつながりが生まれることは少ないかもしれませんが。それは連研が特定のメンバーで連続して参加する機会を与えてくれるからでしょう。さらに話し合いの場の存在が大きいのだと思います。テーマを通して話し合いながら、心を開いてそれぞれの思いを語り、また聞き合いながら共感していきます。そんな研修ですから「連研を受けることができうれしかった」と感じる方が多いのだと思います。また「心から本音で語り合える仲間であった」と、み教えを通しての仲間とのあいも大切に受

け止めていらつしやる方が多いです。尊いことだと思えます。サブテーマには「連研を受けて、変わったこと、変わらなかったことは何ですか」とあります。ドキツとする問いだと思います。こうしているいるなテーマに向き合ってみただけれど、私は何か変わったのでしょうか、それとも変わらないのでしょうか。私自身に引き当てて考えてみますが、「悟り」に対する境涯として、人はどこまでも「迷い」の存在であるとお聞かせいただいております。そういう意味では本質的には変わらないといえるでしょう。しかし、変わった

レッツ!
真宗!

連研

12の問い



中川 大城
おおき
(研修講師)

12の問いも残すところあとわずかとなりました。問い11は「この連研を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください」とあります。みなさま振り返ってみて連研についてどんな感想をお持ちになったでしょうか。これまでの気づきや学びについて振り返ってみたいと思います。

「私の問い」

連研は同一の人物を対象に12回、さまざまな問いをテーマに研修を行います。一般的な講演会もテーマを決めて人が集まるのは同じですが、連研のように

この連研を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください。

たこと」にしたり「蓋をして」生きてきたことを知らされました。それを社会が抱える多くの矛盾のせいだと考えることもあります。しかし、その矛盾さえも社会を構成する私自ら作りだし、自分自身を苦しめていることを連研の学びの中から気づかされました。それを知らされた私が課題に向き合い、克服できるように変わっていくなければ、私を取り巻く環境はおろか、私自

身も含めて何も変わらないのだと思います。このように私の生き方に問うていくことは厳しいことです。仏さまの「悟り」の境涯と同じように、人として生きていくことは到底できません。しかし、仏さまのおこころを聞かせていただくことはできます。これからも私の歩みがブレないように聴聞を重ね、連研で気づかされた「私の問い」から課題を克服していきたいと思います。こうした私の歩みを、私たちの歩みにしようと言ってください。仲間があればどれほど心強いことでしょうか。苦しみ悩む私に阿弥陀さまは「必ず一緒にい

る」とおっしゃいます。そのおこころを共に聞かせていただいた仲間が、苦しみ悩む私に「私も一緒にいるよ」「共に生きていこう」「一緒に歩んでいこう」と言ってくくださるその言葉や思いに支えられていくことがあるのだと思います。仲間（＝同朋）とのあいは何物にも代え難いよろこびであると思います。「私の問い」に向き合っていく厳しさも含め「連研にであえて本当によかった」という私の思いもここに書き添えておこうと思います。

かどうかという問いを持つこと自体が、すでに変わったといえるのだと思います。

これまでの問いを振り返ってみますと、本当の幸せとは何か、今ここに苦悩する私とお浄土はどのような関係性があるのか、神さまという存在をどう受け止めればいいのか、差別を無くすにはどうすればよいか、戦争や非戦平和にどれほど意識を向けて生きてきたかなど、たくさん

テーマの問いを「私の問い」として向き合っていくことがとても大切だと思うのです。また私が変わったかどうかではなく、真実の教えを依りどころとする身において、差別や戦争など「してはならないこと」、あってはならないこと」の気づきもありました。

価値基準を自分自身にするならば、何事も自分に都合よく生きていくことになります。それでは何も変わらないのだと思います。私の生き方と別に仏法があるのではなく、み教えの中で生活を営むことにより、み教えに問われ、み教えに生きるとい

う人生が開かれてくるのだと思います。今まで「仏法を聞く」ことはしてきたとしても「仏法に聞く」ことがどれだけあったでしょうか。それはお聴聞の内容が知識や教養に止まることなく、どれだけ生き方に反映されたかということです。

連研にであえてよかった

私はさまざまな問いを通して、自分の人生を振り返ってきたように思います。そこで「仕方がなかった」「他人のことだから」と自分に言い聞かせ、現代社会のさまざまな課題に対して「見て見ぬふり」をしたり「見なかつ